

新岡垣風土記

第463回

地名のはなし 内浦（うつら）②

岡垣歴史文化研究会 羽山 健一

慶長5（1600）年の関ヶ原合戦で活躍した黒田長政は、豊前から筑前に転封となり、前領主の小早川秀秋から所領を引継いだ。その時の「村々指出前之帳」で内浦村は、田畠数25町4反5畝余、分米大豆366石の村で、田数21町9反3畝余、分米347石余、畠数3町5反1畝余、分大豆18石9斗余である。この数値は太閤検地によるとされている。分米・分大豆は生産高の意で、年貢を田は玄米、畠は大豆で納付していたのである。

『筑前国統風土記』の「田圃志」に元禄5（1692）年頃の内浦村の記事があるので紹介する。

内浦村（村位）中。田畠四拾壹町余。人数貳百九拾四人。家数三十拾八。社一。寺三。田畠高五百壹石式斗余。内畠高九拾六石式斗余。田石別五斗四升。畠石別三斗五升。

とある。石別は生産高1石に対する年貢で、田は54パーセント、畠は35パーセントの税率である。『福岡県地理全誌』に明治9（1876）年頃の内浦村の記録があるので、抜粋要約して紹介する。

内浦村 戸数67戸。人数353人。田畑42町5反余、此石高501石2斗余。正税25石8斗余、此代金73円余。雑税7石6斗余、此代金21円余。山林68町4反余。橋4所。池9所。牛46頭。馬9頭。山岳湯川山、行重山。松林岡松原。井泉鸞ノ井。神社若宮神社。小社3所。仏寺海蔵寺、長源寺、法心寺。小堂3所。景勝地内浦浜。古蹟垂見山、名切宿、海蔵寺谷戦場。人物孝子助六。

明治22（1889）年4月の市町村制施行で、町域の西部地区に岡県村、東部地区に矢矧村が誕生した。この時、内浦村は岡県村の大字となり、内浦区が発足したの

である。その後、岡県村と矢矧村は合併して岡垣村となり、町制施行を経て現在に至るのである。

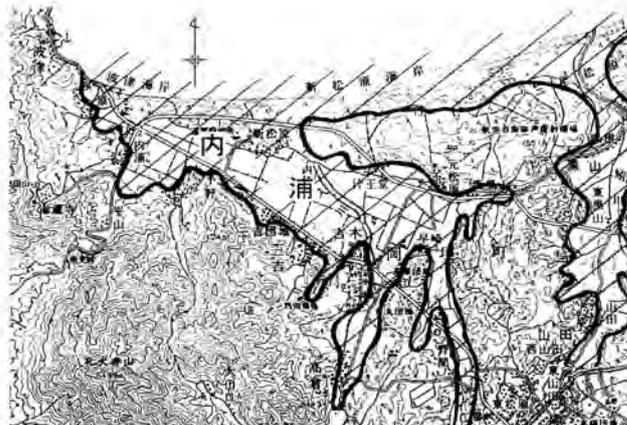
内浦の地名由来を、『筑前国統風土記』の記事で紹介する。

内浦 垂水越の東のふもとにある村也。此所はむかし入海有し故、内浦と云。吉木村の下より西の方天野内浦のほとり迄は、皆入海なりし故、今に田の底より蛤蠣のから出る。天野の内にも大磯、小磯、磯原など云所あり。山きには波のうがちたる岩あり。三吉村の内に塩浜と云田の字有。是皆そのかみ入海有し証也。いつの比よりか悉く田となれり。

とある。内浦は、三里松原の南側に広がる水田地帯が内海だったことを、地名の由来としているのである（地図参照）。

内浦（うつら）の発音について説明する。奈良時代の日本語の特徴として、母音が2つ連続すること、を極度に嫌う発音上の習慣があった。だから母音が2つ連続すると、①その一方が脱落する。多くの場合、前の母音が脱落して後の母音が残る。

②2つの母音が融合して別の母音



▲古代内浦想像図

をつくる。という発音変化である。当地の内浦はUTTIURRA↓UTTURRAの変化で、①に該当するのである。私は、全国に分布する内浦という地名を30カ所以上調査したが、当地以外で「ウツラ」と発音する事例を発見できていないのである。いずれにしても、岡垣町の内浦は、古代からの発音を現代まで継承した事実を史料で証明できる、稀有な地名である。

おわり

【お知らせ】新岡垣風土記は、筆者の皆さまのご意向により、今日をもって連載を終了します。長期にわたりご愛読いただきありがとうございます。来月号の広報おかがきで、これまでの連載を振り返る記事を掲載予定です。